

2026(令和8)年度 入学試験問題

一般選抜 前期日程

文学部 人間関係学科  
小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時30分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に7ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読み、問いに答えなさい。

論理的に考えることは、学術のみならずビジネスや教育、日常の判断に至るまで幅広い分野でその重要性和必要性が指摘されている。世界共通で不変のように語られている論理的思考だが、そもそも論理的であるとはどのようなことなのか、論理／非論理の線引きは何によって行われるのか。論理的に思考する方法は本当にひとつなのか。

本書はこれらの問いに、論理的思考が世界共通で不変という考えのもとになった論理学の「形式論理」に対して、論理には文化的側面があることを指摘し、それを価値観に紐づけられた「本質論理」と名づけて、思考の「基本パターン」の側面と「文化的」側面の両面から答えていきたい。

思考する目的が異なれば、その手段としての結論を導く手続きが変わり、論理的であることの基準が変わる。目的に応じて異なる論理的思考法を使いこなすことが重要で、それこそがこれからの論理的思考であると指摘し、その道筋を示すのが本書の目的である。複数ある論理的思考を、目的に応じて選択して使いこなすことを本書では「多元的思考」と呼ぶことにする。

筆者が論理的であること、そして論理的思考が「ひとつ」ではないことに気づいたのは、アメリカの大学に留学して、エッセイと呼ばれる小論文を提出した時だった。

「評点不可能」と赤ペンで書かれ突き返された時の衝撃は今でも忘れられない。それ以上に衝撃的だったのは、どんなに丁寧に書き直しても同じコメントが繰り返された一方で、いったんアメリカ式エッセイの構造を知って書き直すと、評価が三段跳びで良くなったことである。英語が急に上達したわけでも知識が格段に増えたわけでもない。しかしアメリカ式のエッセイの型で書くと、それまで自分が重要だと思っていたことが必要なくなり、エッセイのポイントである主張すらも変わってくる。すると必然的に結論も変わってくるという不思議を体験した。それは論文の構造に導かれた論理と思考法の日米の違いという、まさに①「見えない文化衝突」の体験だった。

論理の筋道というのは、作文の構造によって導かれること、それを使えばその都度一から考える必要はなく、論理的に考え、書くことができること、そしてその論理の型を共有している人たちと円滑にコミュニケーションできることを実体験から学んだ。

論理的思考はグローバルに共通なものではなく、実は文化によって異なっており、それぞれの教育の過程で身につけていくものなのである。そして論理的思考の型は、それぞれの社会が何を重視し文化の中心に据えるのかと深く関わっている。

たとえば日本では「西洋」と一括りに論じられることが多いアメリカとフランスの小論文の構造は実は全く異なっており、相手国で自国の小論文の型で書くと、「何を言っているのか分からない」、「つながりが不明」、「全く不十分な議論」、そして「論理的でない」と落第点をつけられるのである。

なぜそんなことが起こるかといえば、作文を書く目的が異なるからである。結論を先取りするならば、アメリカ式のエッセイは、自己の主張を分かりやすく効率的に論証して、相手を説得することが目的であるのに対して、フランス式小論文の目的は、時間をかけてあらゆる可能性を吟味し矛盾を解決すること、それを公共の福祉という政治的判断に生かすことである。

アメリカ式エッセイは主張に関係しない要素を削ぎ落とすことによって、複雑な世界を単純化して問題解決を行うのに対して、〈正 - 反 - 合〉の弁証法を型にしたフランス式小論文は、常識的な見方とそれに反する見方、それら二つを総合して矛盾を解決することで、多様な人々で構成される社会全体の利益に目を向けさせる。それぞれの国の小論文には、あるべき結論の形と結論に至る道筋——それが論理となる——がそれぞれに存在する。

アメリカ式エッセイは、経済のグローバル化と英語の覇権的地位の獲得とともに、ビジネスのみならず多くの領域で世界標準の書き方になっている。確かにアメリカ式エッセイを学ぶことは、効率的なコミュニケーションを行う上でとても役に立ち、多くの人に必須の知識と技術であることは間違いない。論文の書き方やビジネスの指南書を見ると、「論理的思考」といわれているものの実態は、このエッセイの思考法であることが多い。しかしそのみで押し通そうとすると、論理的思考の思わぬ落とし穴にはまることも確かである。フランスとの対比はそれを鮮やかに見せてくれる。

とはいえ、こうした論理的思考の方法は「無限に」あるわけではなく、いくつかのタイプを「型」として提示することが可能である。本書では「経済」（アメリカ）、「政治」（フランス）、「法技術」（イラン）、「社会」（日本）の四つの領域に固有の論理と思

考法を、各領域で書いたり話したりする時の「型（構造）」に注目して提示する。政治、経済、法、社会の領域は、どこの国にも併存しているが、「どの領域の論理を使うのか」によって、その判断（結論）は変わってくる。このようなアプローチを取ることで、国ごとに無数に論理とその思考法があるとする文化相対主義に陥らず、有益かつ基本的なタイプを特定することができると思う。

その時、四つの領域の原理をそれぞれひとつの「文化」と捉えて、社会の中心に据えている国、具体的には、アメリカ、フランス、イラン、日本の四カ国の学校で教えている「作文の型」に注目して各領域の論理的思考を抽出する。そうすることで、学校で教えられ実際に使われている作文の「型」を通して、私たちは各領域の論理の本質——目的と手段、価値観——を理解し、かつ文脈／場面に応じて「使いこなす」ことができるようになるのである。

子どもの作文の型から経済や政治領域の思考法が分かるのか、といふかる読者もいるかもしれない。しかし、思考法を理解するために、学校の作文に注目する有効性は、異なる領域を代表する国の子どもたちが同じ絵を見てその絵をどう説明し、理由づけるのかという作文実験の結果と、その実験結果を裏づける教育の目的と実践から明らかにされている。

以下は、ある少年の一日を描いた四コマ漫画を、日本とアメリカの子どもが説明した事例である。実験の参加者は日米それぞれ小学校最終学年の四学級の児童、日本一四四名（小学校六年生）とアメリカ八二名（小学校五年生）である。両国の大学生に同じ課題で作文してもらおうと、小学生とほぼ同じ結果が持続して現れている。少年の名前は日本ではけんた、アメリカではジョンとした。

【日本】 けんた君は ねないでテレビゲームをしていて そしたら しあいじかんまえになってしまっ て いそいでユニホームにきがえてバスにのったところ まちがえて そしてしあいじかんにまにあわなくて せんぱつでピッチャーができませんでした。

【アメリカ】 私のジョンの一日に対する意見は、一日の始めから終わりまで彼はイライラした一日を過ごしたということです。その日は彼にとってとても皮肉な日で

した。まず彼はテレビゲームを長くやりすぎたので、それが悪い出来事の連鎖反応を引き起こしたのです。彼は遅く起きたので精神的にパニック状態になり、実際それが間違ったバスに乗る原因となり、それが野球の試合の練習におくれる原因になったのです。要するに、彼は悪い一日を過ごしました。

日本の子どもの作文は、この例のように出来事を起こった順番に連鎖して「……して、……して」と一文で述べる「時系列型」と、出来事を起こった順番で述べた後に教訓を付け加えて「教訓のお話」にするタイプが九割以上を占めるのに対して、アメリカは、最初に結論となる主張を述べて、その根拠として出来事を述べる、つまり、エッセイの型を絵の説明の枠組みとする作文が三分の一以上を占めた。

〈主張 - 根拠 - 結論〉のエッセイの思考法に慣れたアメリカ人からすると、時系列で出来事を述べる日本の子どもの作文には、最も重要な「主張」がない、当然主張の論証もされていない、時間順に述べただけで全く思考した跡が見られない非論理的な作文ということになってしまう。

他方、日本人にとって最初に主張を述べるのは、自己主張が強く最初に結論が分かってしまう面白みのない展開に感じる。そのため、最初に主張を述べることに心理的、道義的な強い抵抗感がある。そもそも絵の説明に主張が必要なのか、因果関係でいちいち理由づけする必要があるのか、それよりは四コマ漫画の主人公に寄り添い共感するような記述のスタイルを取るべきではないかと考えてしまう。

このように、それぞれの国の人々が相手の説明に納得できない理由は、「経済」、「政治」、「法技術」、「社会」という相異なる四つの領域の目的を知ることによって、すっきりと見えてくるだろう。

しかし「論理的であること」が多くの小論文の指南書が指摘するように単に証拠を示したり、帰納や演繹、因果を使って説明したりすることだと受けとめると、この文化の衝突はその原因が全く見えないまま、能力の高低の問題にすり替えられてしまう。小論文の型に現れる「スタイル（様式）」の違いが「論理的思考」という近代社会で価値ある思考法を通して、学力や能力に転換される。四つの領域では評価される能力の質が全く異なり、評価の方法も違っている。

アメリカは資本主義の旗手として経済が重視されているのは自明のことと受けとめ

られているが、学校で教えているのはいかに利益を上げて資本を蓄積し投資するかではない。学校で教えているのは、資本主義経済で重視されるものの見方・考え方とその表現法である。

とはいえ、日米の作文実験の実例を見ると、やはり日本語とそれを使う日本人は非論理的なのだとは勘違いしてしまう読者もいるかもしれない。

論理的思考を文化的な側面、すなわち価値観から解き明かす本書では、「社会領域」を代表する日本の作文の論理とその思考法も明らかにする。日本の作文教育では、どんなにお金を積んでも、そして戦略的なプロジェクトを実行しても達成することができない価値あるものが生まれ、その作文の論理が社会を支えていることが分かるだろう。日本語は曖昧であり、日本人は論理的に考えることが苦手であるという考えは本質的な議論ではない。日本では結論をあえて曖昧にする社会的な要請があるために、そのような印象を持たれるだけで、論理学の形式論理の規則を日本語に適用することになんら問題はない。

日本では決められたルールよりも、「その場の要請」を感じ取って場にふさわしい言動を取ることが求められる傾向が強い。それを逆手に取ってその「場」が、たとえば経済領域の論理で思考し表現する場であると明確に設定すれば、その場の要請に応じて論理的に考え表現できるはずである。そのスイッチの切り替えができる技術も明らかにしたい。

こうして四つの領域の思考法を明らかにしたところで本書がすすめるのは、目的と場面によって、四つの型を使い分けられるようになることである。それこそが、科学技術と資本主義に支えられ、ひとつの論理で押し通してきた近代の次の時代の論理となり、また力となると考える。論理的思考から、②多元的思考へのシフトである。

(中略)

私たちが経験してきた近代という時代は、国家主義、資本主義、民主主義によって特徴づけられ、これらによる世界の統合が夢見られた。しかし今や多様な価値観を統合したり調節したりする特権的な視点はもはや存在しない。何かひとつで押し通すことは、その論理のもとに他の論理を押し込めることになる。

コロナ禍は資本主義をストップさせ、人類の生存に不可欠なものとしてないものを浮かび上がらせて世界中に伝統回帰を促した。しかしそれは近代以前に戻ることを意味しない。科学技術の恩恵を受け、経済的な取引をグローバルに続けながら、お互いのコミュニケーションを観察し合う世界に私たちは足を踏み入れている。異なる領域の原理に基づいてコミュニケーションが行われていることを認識できると、それを尊重しつつ観察することが互いのコミュニケーションを阻害しない方法であることが分かる。世界は物を通してみると全く変わりがないように見えても、その意味づけが情報の世界で変わるのである。「物質から情報へ」、「物から意味／価値の時代へ」の転換である。

「時代が変わる」とは、一般に支配者の交代や政治形態の変化を指す。それに対して「パラダイムシフト」とは、それまで支配的だった「ものの見方や考え方」が変わることを指す。私たちが体験しているのは、まさにこのパラダイムの変化だといえる。

(渡邊雅子『論理的思考とは何か』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

問1 下線部①にある『『見えない文化衝突』の体験』とはどのような体験のことをさすのかを説明しなさい。(40点)

問2 下線部②にある「多元的思考へのシフト」とはどういうことをさすのかを、本文に即して説明しなさい。(40点)

問3 著者の主張をふまえた上で、これからの時代に必要な「ものの見方や考え方」について、あなたの考えを800字以内で述べなさい。(120点)